

文科省情報ひろばサイエンスカフェ

「小惑星探査機『はやぶさ』は日本の星になった？」報告書

日 時 : 平成22年8月27日(金) 19:00~20:30

場 所 : 文部科学省情報ひろばラウンジ(旧庁舎1階)

主 催 : 日本学術会議、文部科学省

講 師 : 阪本 成一(宇宙航空研究開発機構 宇宙科学研究所 教授)

ファシリテーター : 渡辺 政隆(日本学術会議連携会員、科学技術振興機構科学コミュニケーションエキスパート)

報告: 増渕ふみ(サイエンスコミュニケーター)



8月27日(金)に、文部科学省情報ひろばにて、サイエンスカフェが開催されました。今回のサイエンスカフェのテーマは、「小惑星探査機『はやぶさ』は日本の星になった?」。講師として宇宙航空研究開発機構 JAXA の阪本成一先生、ファシリテーターとして日本学術会議連携会員で科学技術振興機構の渡辺政隆さんが、社会現象にもなった「はやぶさ」についての話題を提供しました。

冒頭から、今回は社会現象にもなった「はやぶさ」についてのカフェであると紹介されると、阪本先生は、「サイエンスカフェなので、社会現象の話だけでなくサイエンスの部分も話しましょう。」と、まずは、「はやぶさ」の科学的意味、ミッション、技術的特徴、成果を、順番にお話しされました。

次に、社会現象にもなった「はやぶさ」について話題が移ると、広報担当という立場から、「はやぶさ」を語る上でのキーワード、力道山、擬人化、人間模様、と、3つのキーワードを出しながら今回の盛り上がりの特徴を説明されました（はやぶさが無謀にも大きなものに挑戦して行く様が力道山と重なったそうです）。

また、広報として社会に発信した事例として、88万人の署名が集まった星の王子さまキャンペーン、特命広報担当によるツイッター、さらには、JAXA以外の第三者ブロガーたちによるインターネットでの広まりなど、実際に起こった波及のすごさについて語られました。

この盛り上がりについて語った最後に、阪本先生は、社会現象とはなったものの果たして本来の研究成果は一般に理解されたのか、今後の研究もドラマを求められるのか、と、世間の熱狂とは裏腹に浮かび上がった問題点について語られる場面もありました。逆に言うと、ドラマ性があれば科学も話題になりやすいということなのかもしれません。

阪本先生からの話の後、会場からの質問では、さすが話題の「はやぶさ」で、たくさんの人から質問や意見が飛び交いました。その日の午前中に日本科学未来館で展示されていたはやぶさカプセルを見てきたという男の子からは、ウーメラ砂漠の名前も出て、みんな驚きました。

後半は、会場からの質問、「何故こんなに盛り上がったのだとおもうか？」をきっかけに、参加者がそれぞれ感じた盛り上がりの理由を自由に意見しあう場面もあり、まさにサイエンスカフェらしい会になりました。なかでも多くの人が頷いた意見は「最後は燃え尽きた」ことが大多数の人の心情を煽ったのではないかというものでした。

いろいろなことで科学に注目が集まる昨今、終わった後の参加者の楽しそうにほころんだ表情を見ると、この様に研究者と一般参加者とがお互いに壁なく話せる機会の良さを改めて感じさせられました。

